

第 1 章 調査研究の概要

1 調査研究の経緯

本県では、学級経営の充実による「学びに向かう集団づくり」と、分かる喜びや達成感を実感させるための「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」とを一体的に行う「学業指導」の充実を推進している。このことに意図的・積極的に取り組むことにより、社会性や確かな学力の育成に繋がることが期待される。

平成 25 年度は、「学業指導の充実を図る授業づくりと校内研修プログラム」について調査研究を行い、学業指導を充実させる 4 つのポイントを意識して教育活動に組織的に取り組むことの大切さを確認した。

本年度は、本県の学業指導の状況を調べるため、児童生徒用の調査用質問紙を作成し、抽出校を対象に質問紙調査（以下、抽出調査）を行うこととした。

2 調査研究の目的

学習指導及び児童・生徒指導の充実を図るために、本県が推進している学業指導の現状の把握及び尺度の作成に関する調査研究を行い、資料としてまとめ、関係学校等に配布するとともに、研修等で活用することにより一層の学業指導の充実を促し、教員の資質向上及び児童生徒の学力向上や社会性の育成に資する。

3 調査研究の方法

本調査研究は、2 年間の継続事業である。1 年次に当たる本年度は、はじめに本県の学業指導の状況を把握するための調査用質問項目に基づく調査用質問紙を作成し、県内において抽出調査を行った。

その後、抽出調査の集計及び分析を行い、結果をまとめ、本調査報告書及びパンフレットを作成した。

また、各学校が学業指導を効果的に進めるために、自校の学業指導の状況を子どもの姿から測ることができる「学業指導尺度」を抽出調査の分析結果を基に作成した。

(1) 抽出調査で用いる調査用質問項目の作成について

抽出調査で用いる調査用質問紙の質問項目（以下、調査用質問項目）は、学業指導の視点ごとに、教職員の指導や取組の成果として子どもに表れる姿や行動（どのような行動や心情面に表れるか）を想定して作成した。

学業指導には、次頁の表 1 に示すように、2 本の柱と 6 つの視点がある。調査用質問項目の作成に当たり、学業指導の 2 本の柱の「学びに向かう集団づくり（以下、集団づくり）」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり（以下、授業づくり）」を、それぞれ「学級（学校生活）に関する質問」と「学習（授業）に関する質問」とし、6 つの視点で各 10 問、合計 60 問を作成した。

表 1：学業指導の 2 本の柱と 6 つの視点

学 業 指 導 の 2 本 の 柱		
学びに向かう集団づくり		子どもが意欲的に取り組む授業づくり
6 視 点	帰属意識の高い学級づくり	自信をもたせる授業づくり
	規範意識の高い学級づくり	コミュニケーション能力を育む授業づくり
	互いに高め合える学級づくり	一人一人の実態に配慮した授業づくり

右の図 1 は、各視点 10 問の構成を示すものである。8 問は一人一人の「意識や行動」を測るために自分を評価する質問項目とし、残り 2 問はクラス（集団）の「意識や状況」を測るためにクラス全体を評価する質問項目とした。

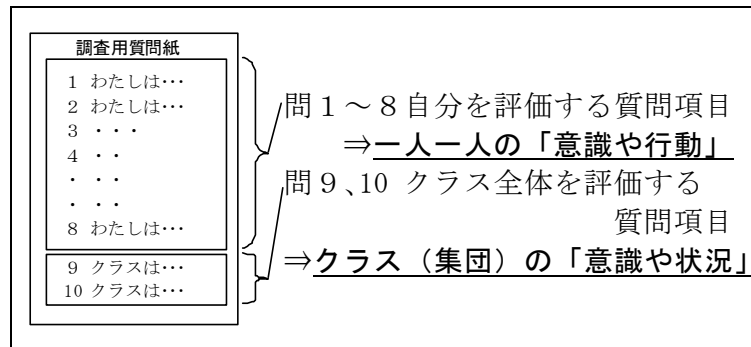


図 1：調査用質問紙の 10 問の構成

(2) 抽出調査について

ア 抽出の方法

抽出調査は、質問紙による調査であることから、質問の意味を理解し、正しく読み取ることができると考えられる小学校 4 年生から高等学校 3 年生までの 9 学年を調査対象学年とした。

(ア) 小・中学校

県内の小・中学校について学校規模別のグループを設定し、それぞれのグループから偏りがないように、小学校は 14 校、中学校は 13 校を抽出し、その学校の当該学年の 1 学級を対象とした。

(イ) 高等学校

県立高等学校（全日制）について、地域（旧学区を参考に）や学科の偏りがないように 10 校を抽出し、その学校の当該学年・学科の 1 学級を対象とした。

イ 調査の実施

(ア) 調査方法

質問紙により回答を求めた。所要時間は 15 分～20 分程度とした。

(イ) 実施期日

平成 26 年 7 月 1 日(火)から 7 月 18 日(金)までのうち、学校が定めた期日で実施した。

(ウ) 調査実施数及び回収率

調査実施数等の詳細については、次頁の表 2 に示したとおりである。

調査は、担任（担当教員）が自教室で質問紙を配布し、児童生徒に回答させ回収しているの
で、回収率は全て 100%となった。なお、当日欠席した児童生徒は、今回の調査には参加して
いない。

表 2：調査実施数及び回収率

学 年	対 象 学級数	実施児童生徒数 回収／配布（回収率）
小 学 校 第 4 学年	14	413 ／ 413 （100％）
小 学 校 第 5 学年	14	424 ／ 424 （100％）
小 学 校 第 6 学年	14	431 ／ 431 （100％）
中 学 校 第 1 学年	13	393 ／ 393 （100％）
中 学 校 第 2 学年	13	377 ／ 377 （100％）
中 学 校 第 3 学年	13	373 ／ 373 （100％）
高等学校 第 1 学年	10	395 ／ 395 （100％）
高等学校 第 2 学年	10	391 ／ 391 （100％）
高等学校 第 3 学年	10	382 ／ 382 （100％）
計	111	3579 ／ 3579 （100％）

(3) 集計による現状把握について

集計は、調査用質問項目ごとに、学年別に集計することで、県内の状況を把握した。（全集計結果については、本報告書【第 3 章 1 県内抽出調査の集計結果】を参照のこと。）

(4) パンフレットの作成について

本県の学業指導の状況について集計結果の一部を掲載した。また、学業指導の「鍵」となる視点や学業指導の 6 つの視点の関連についてまとめた。（パンフレットの内容については、本報告書【第 2 章 調査研究報告（概要）「確かめよう学業指導」】を参照のこと。）

(5) 学業指導尺度の作成について

調査用質問項目の各視点 10 問中の自分を評価する 8 問を用いて、各学校で活用できる「学業指導尺度」を作成した。その際、回答者やデータを処理する教員の負担を考慮し、それぞれの中で信頼度の高い 5 問（6 視点 計 30 問）を精選した。（学業指導尺度の作成については、本報告書【第 1 章 5（3）】を参照のこと。）

4 集計結果及び集計結果の考察

抽出調査によって得られた回答について、以下に、集計結果と集計結果の考察を述べる。

(1) 集計結果について

～調査用質問項目 60 問の結果～

抽出調査した質問項目 60 問全ての回答結果は、右の図 2 のように上から

- ・「調査用質問項目（原文）」
- ・抽出調査結果の集計表（学年別）
- ・グラフ

で表し、本報告書【第 3 章 1 県内抽出調査の集計結果】に示す。

(2) 集計結果の考察

今回の調査では、4 件法を用いたため、最

わたしは、このクラスの一員でよかったと思う。

学年コード	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
あてはまる	61.9	62.0	69.1	65.8	61.0	65.7	58.0	45.4	48.6
ややあてはまる	27.2	29.7	23.5	28.8	32.6	30.6	35.7	45.9	39.9
ややあてはまらない	7.8	5.5	5.6	5.1	5.8	3.2	4.3	7.9	9.4
あてはまらない	3.2	2.9	1.9	0.3	0.5	0.5	2.0	0.8	2.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

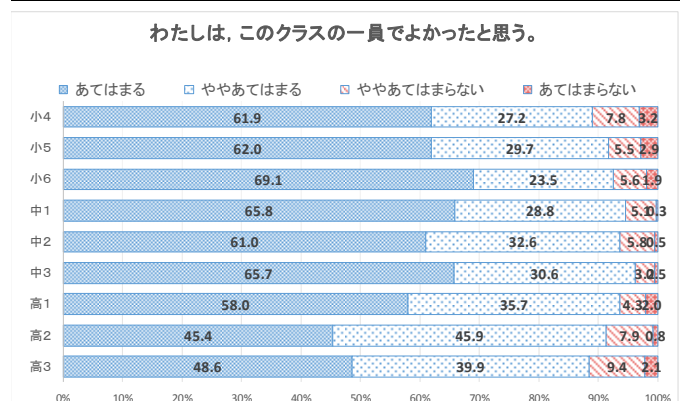


図 2：【第 3 章 1－（1）】より

高が 4.0pt、最低が 1.0pt、中央値が 2.5pt となる。全体的な傾向として、「集団づくり」の柱に属する調査用質問項目において、肯定的な回答の割合が高い項目が多かった。児童生徒の姿（回答結果）からは、「集団づくり」が進んでいると考えられる。

表3:各視点の平均値（自分を評価した8問）【第3章1－(2)】より

		帰属意識	規範意識	互いに高め合う意識	学習への自信	コミュニケーション能力	学習への取組
小学校 第4学年	度数	405	402	409	407	408	409
	平均値	3.17	3.35	3.26	3.22	3.17	3.12
	標準偏差	0.58	0.49	0.60	0.65	0.64	0.64
小学校 第5学年	度数	416	416	417	415	420	419
	平均値	3.21	3.29	3.27	3.20	3.16	3.04
	標準偏差	0.54	0.53	0.58	0.63	0.62	0.62
小学校 第6学年	度数	424	429	425	429	423	423
	平均値	3.24	3.29	3.26	3.19	3.12	3.04
	標準偏差	0.54	0.47	0.52	0.56	0.57	0.57
中学校 第1学年	度数	387	390	391	389	386	390
	平均値	3.33	3.39	3.31	3.26	3.25	3.13
	標準偏差	0.52	0.45	0.53	0.56	0.54	0.58
中学校 第2学年	度数	377	376	375	376	372	374
	平均値	3.22	3.26	3.18	3.07	3.09	2.91
	標準偏差	0.55	0.47	0.56	0.59	0.56	0.60
中学校 第3学年	度数	372	372	373	373	369	371
	平均値	3.31	3.33	3.23	3.06	3.14	2.90
	標準偏差	0.57	0.44	0.54	0.54	0.55	0.55
高等学校 第1学年	度数	393	391	392	392	391	392
	平均値	3.13	3.31	3.03	2.88	3.05	2.82
	標準偏差	0.59	0.41	0.53	0.52	0.49	0.53
高等学校 第2学年	度数	388	390	390	390	388	390
	平均値	3.06	3.22	2.94	2.79	2.90	2.68
	標準偏差	0.56	0.45	0.56	0.55	0.52	0.58
高等学校 第3学年	度数	381	381	381	379	377	378
	平均値	3.05	3.19	2.95	2.79	2.87	2.67
	標準偏差	0.62	0.44	0.60	0.57	0.56	0.58

「授業づくり」に属する各調査用質問項目については、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が低くなる傾向が多く見られた。この要因として、学校段階が上がるにつれて、授業において自分の意見や考えを表出しなくなる（しにくくなる）傾向にあることや、授業の指導形態（学習形態）の変化等が考えられる。また、次頁図3、図4に示すようにコミュニケーション能力に関する調査用質問項目では、「聞く」に関する項目に比べて「話す」に関する項目が低い結果となっており、本県児童生徒の課題であることが確認された。

わたしは、授業中、発言することが楽しい。									
学年コード	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
あてはまる	25.2	22.7	14.7	20.7	12.2	12.9	7.6	3.6	6.9
ややあてはまる	34.4	32.2	27.7	33.2	29.7	25.2	22.0	16.1	17.2
ややあてはまらない	22.5	26.0	35.1	30.7	35.5	42.4	45.1	51.2	45.9
あてはまらない	17.9	19.1	22.6	15.3	22.5	19.6	25.3	29.2	30.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

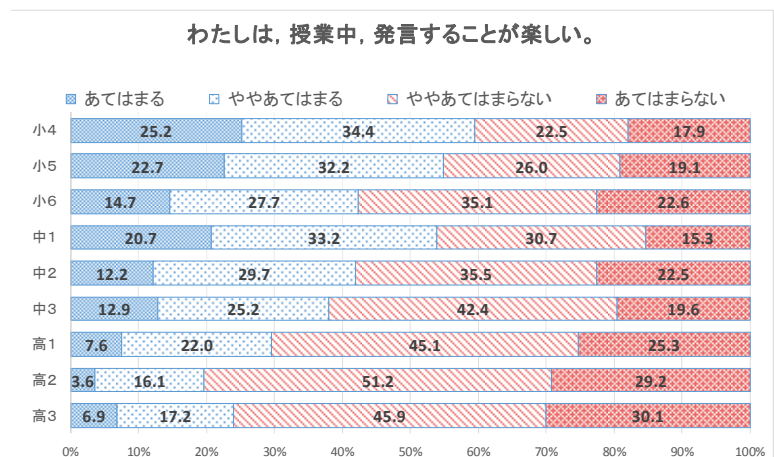


図3: 学年別集計結果「コミュニケーション能力」

授業中、友だちの意見や考えが自分とはちがっていても、よく聞くようにしている。									
学年コード	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
あてはまる	60.7	61.5	59.7	68.9	58.1	59.5	53.4	47.3	39.5
ややあてはまる	28.9	30.7	34.5	25.8	34.7	34.9	42.3	45.3	50.8
ややあてはまらない	7.8	5.7	4.9	4.3	5.8	5.1	4.1	6.4	8.2
あてはまらない	2.7	2.1	0.9	1.0	1.3	0.5	0.3	1.0	1.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

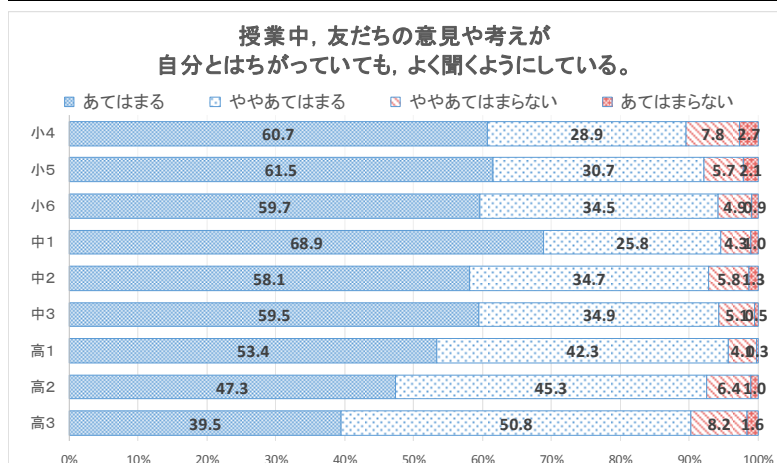


図4: 学年別集計結果「コミュニケーション能力」

5 分析結果及び分析結果の考察

学業指導の効果や指導のポイント等を調べるために、抽出調査によって得られた集計結果を統計的な分析手法を用いて分析した。分析には、統計処理ソフトウェア「SPSS Statistics Vr22」を用いた。

(1) 「学業指導の2本の柱及び6つの視点」と「調査用質問項目」の整合性について～因子分析～

はじめに、抽出調査に用いた視点ごとの調査用質問項目が、学業指導の2本の柱及び6つの視点として相応しいものであるかどうか（整合性）を確認するために、本調査で作成した質問項目の因子分析を行った。分析の過程で、以下に示すように、それぞれの因子の影響(因子負荷量)の大きい質問項目がまとまった。それらに共通する因子の名付けについては、当センター研究調査部で検討を行い決定した。

なお、各視点で調査した10問のうち、「自分を評価する質問項目」8問（6視点で合計48問）を分析の対象とした。

ア 「学業指導の2本の柱」との整合性(2因子を抽出する分析結果から)

学業指導が2本の柱で構成されていることから、因子数を「2」と設定して因子分析を行った。分析の過程でより明確に因子負荷量をとらえるために、2つの因子の両方に関連があった質問項目は、1回目後と2回目後に分析からカットした。ただし、それは、これらの項目の重要度が低いという意味ではなく、逆にこれらの質問項目はどちらの因子にも関連がある大切な項目であると言える。

最終結果は、下表4のとおりである。【第3章2-(1)ア】

表4: 因子分析の結果(2因子に固定)

3回目(最終)

	因子	
	1	2
	クラス集団における生活の中での自分の意識や行動の状況	授業及び学習における自分の行動や取組の状況
コミ5 授業中友だちの意見や考えが自分とはちがっていてもよく聞く	.711	
規範7 相手の気持ちをきずつけることを言わない	.693	-.203
互高3 友だちが協力してくれることでやる気になる	.647	
互高4 学校行事でクラスやチームの目標を達成するために努力している	.646	.103
規範4 学校やクラスのルールを守っている	.619	
規範1 学校やクラスのルールを守ることが大切だ	.618	
帰属3 クラスの人みんなが仲間だ	.614	
コミ3 授業中友だちの意見や感想を最後まで聞いている	.612	
規範5 教室のつくえやロッカーを大切に使っている	.590	-.121
コミ4 授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない	.558	-.130
帰属2 クラスのために役に立ちたい	.552	.177
互高5 友だちの意見を聞いて自分の意見を考え直すことがある	.552	
帰属6 学校行事でクラスの人みんなと感動する	.538	
帰属4 学校行事では準備をふくめて進んで取り組んでいる	.521	.150
互高1 クラスで話し合う場面では真剣に話し合う	.516	.228
規範2 係や委員会の仕事があれば忘れずにやる	.512	
規範3 授業が始まる前にいつも着席している	.492	-.128
帰属1 このクラスの一員でよかった	.489	
互高7 クラスのみんなのよいところを知っている	.484	.226
規範8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	.482	.201
帰属8 教室にいと気持ち落ち着く	.481	.164
コミ8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがよくある	.457	.314
帰属5 クラスの大切な一員だ	.449	.252
互高6 係や委員会などの仕事に工夫をしながら取り組んでいる	.447	.259
互高2 クラスの中に目標としている仲間がいる	.433	.140
規範6 教室にゴミが落ちていたのに気づいたら拾う	.424	.148
自信7 授業中に自信をもって自分の意見を言うことができる	-.313	1.004
コミ2 授業中発言することが楽しい	-.288	.998
コミ1 授業中安心して発言することができる	-.178	.881
取組1 勉強のことで先生に気軽に質問することができる		.644
自信4 授業中自分の意見が大切にされてうれしかったことがある		.642
取組7 授業中むずかしい問題を出されるとやる気が出てくる		.566
自信6 授業中に先生からほめられてうれしかったことがある	.114	.557
コミ6 授業中友だちや先生に自分の考えを分かりやすく伝えている	.232	.506
取組3 提出物に先生が書いてくれたことがその後の学習に役立っている	.169	.467
取組4 先生に話を聞いてもらって勉強の仕方を見直したことがある	.120	.466
取組2 先生の手助けによって分からないことを解決することがある	.146	.445
互高8 クラスで活動していて自分のよいところに気がつくことがある	.294	.427
コミ7 授業中話し合い教え合いで自分の考えが深まる	.350	.423
取組8 学習の内容や方法を自分で選べる授業は取り組みやすい	.187	.403

因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

1回目後にカットした質問項目

帰属7 教室のけいじ物がはがれていたら直す	.397	.167
自信2 授業中むずかしい問題が解けてうれしかったことがある	.313	.312
取組6 家で自分の苦手なところを勉強している	.308	.284
取組5 自分の勉強で得意なところと苦手なところがよく分かっている	.233	.176
自信1 授業の内容をだいたい理解している	.190	.382
自信5 授業中できるだけ自分ひとりの力で問題を解決しようとしている	.153	.324

2回目後にカットした質問項目

自信8 やる気をもって授業に取り組んでいる	.331	.399
自信3 よく理解できなかったところを聞いたり復習したりする	.263	.388

得られた2つの因子は下に示すように名付けた。

- ・因子1：「クラス（集団）における生活の中での自分の意識や行動の状況」
- ・因子2：「授業及び学習における自分の行動や取組の状況」

この2つの因子は、それぞれ、学業指導の2本の柱である「集団づくり」と「授業づくり」に相当する生徒の姿（状況や成果）であると考えられる。このことから、2本の柱と本調査で用いた質問項目の整合性を確認できた。

なお、この分析結果において、「コミュニケーション能力を育む授業づくり」で設定した質問項目8問のうち、次の4問については、「学級（学校生活）での状況」に属することが分かった。

- ・コミ5「授業中友だちの意見や考えが自分とはちがっていてもよく聞く」
- ・コミ3「授業中友だちの意見や感想を最後まで聞いている」
- ・コミ4「授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない」
- ・コミ8「話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがよくある」

これは、「授業づくり」で設定した質問項目が、「集団づくり」の因子に分類されたということである。その要因は、コミュニケーション能力が、授業だけでなく学級集団の中での様々な話し合いの場面で育成されるためであると考えられる。

また、「自信をもたせる授業づくり」として設定した質問項目のうちの下に示す5問が、どちらの因子にも関わる項目であることが確認されたため、分析の途中でカットした。

- ・自信2「授業中むずかしい問題が解けてうれしかったことがある」
- ・自信1「授業の内容をだいたい理解している」
- ・自信5「授業中でできるだけ自分ひとりの力で問題を解決しようとしている」
- ・自信8「やる気をもって授業に取り組んでいる」
- ・自信3「よく理解できなかったところを聞いたり復習したりする」

つまり、これら「自信をもたせる授業づくり」の5問は、学業指導の2本の柱の両方に関連が強い大切なものであることを表していると考えられる。

イ 「学業指導の6つの視点」との整合性（6因子を抽出する分析結果から）

学業指導は6つの視点から構成されていることから、因子数を「6」と設定して因子分析を行った。この因子分析で次の6因子が、下及び次頁表5【第3章2（1）イ】に示す順序で抽出された。

第1因子：『 <u>帰属意識</u> 』	第2因子：『 <u>規範意識</u> 』
第3因子：『 <u>学習への自信</u> 』*1	第4因子：『 <u>コミュニケーション能力</u> 』
第5因子：『 <u>学習への取組</u> 』*2	第6因子：『 <u>互いに高め合う意識</u> 』

この6視点は、学業指導の6視点とほぼ合致しており、抽出調査に用いた調査用質問項目と学業指導の6視点との整合性を確認することができた。なお、第3因子と第5因子については、それぞれ次のように考えて因子名を名付けた。

*1 教師が学業指導の視点である「自信をもたせる授業づくり」を行うことによって、子どもたち一人一人の学習への自信が高まったと考えられるので、「学習への自信」とした。

*2 教師が学業指導の視点である「一人一人の実態に配慮した授業づくり」を行うことによって、子どもたち一人一人の学習への取組や意識が高まると考えられるので、「学習への取組」とした。

なお、この分析において、次の調査用質問項目が、設定した視点とは違う因子に属する結果となった。

- ・取組7「授業中むずかしい問題を出されるとやる気が出てくる」が
「学習への取組」から「学習への自信」因子に。
- ・自信7「授業中に自信をもって自分の意見を言うことができる」が
「学習への自信」から「コミュニケーション能力」因子に。
- ・コミ5「授業中友だちの意見や考えが自分とは違っていてもよく聞く」が
「コミュニケーション能力」から「互いに高め合う意識」因子に。

表5: 因子分析の結果(6因子に固定)

4回目 最終

	因子					
	1	2	3	4	5	6
	帰属意識	規範意識	学習への自信	コミュニケーション能力	学習への取組	互いに高め合う意識
帰属3 クラスの人みんなが仲間だ	.868					
帰属1 このクラスの一員でよかった	.853					-.116
帰属5 クラスの大切な一員だ	.772			.101		-.178
帰属8 教室にいると気持ちが落ち着く	.666					
帰属2 クラスのために役に立ちたい	.591					
帰属6 学校行事でクラスの人々と感動する	.530		-.196			.249
互高7 クラスのみんなのよいところを知っている	.503					.208
帰属4 学校行事では準備をふくめて進んで取り組んでいる	.491					.111
互高4 学校行事でクラスやチームの目標を達成するために努力している	.439					.335
規範4 学校やクラスのルールを守っている		.825				-.100
規範3 授業が始まる前にいつも着席している	-.120	.645				
規範1 学校やクラスのルールを守ることは大切だ	.135	.532			.140	
規範5 教室のつくえやロッカーを大切に使っている		.516				.102
規範2 係や委員会の仕事があれば忘れずに行う		.477	.113			
規範7 相手の気持ちをきずつけることを言わない		.468		-.111		.169
コミ4 授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない		.350				.321
取組7 授業中むずかしい問題を出されるとやる気が出てくる		-.135	.768	.113		
自信1 授業の内容をだいたい理解している			.694		-.121	
自信5 授業中できるだけ自分ひとりの力で問題を解決しようとしている			.625		-.144	
取組6 家で自分の苦手なところを勉強している			.620	-.106		
自信3 よく理解できなかったところを聞いたり復習したりする			.528		.141	
自信8 やる気をもって授業に取り組んでいる		.181	.480			
取組8 学習の内容や方法を自分で選べる授業は取り組みやすい			.463			
自信2 授業中むずかしい問題が解けてうれしかったことがある	.111		.421			.194
取組5 自分の勉強で得意なところと苦手なところがよく分かっている			.369			
自信7 授業中に自信をもって自分の意見を言うことができる			.118	.805		
コミ1 授業中安心して発言することができる				.803		
コミ2 授業中発言することが楽しい				.790		
取組2 先生の手助けによって分からないことを解決することがある			-.106		.729	
取組4 先生に話を聞いてもらって勉強の仕方を見直したことがある			.110		.691	
取組3 提出物に先生が書いてくれたことがその後の学習に役立っている			.215		.653	
取組1 勉強のことで先生に気軽に質問することができる			-.120	.312	.563	
コミ5 授業中友だちの意見や考えが自分とはちがっていてもよく聞く		.304				.620
互高5 友だちの意見を聞いて自分の意見を考え直すことがある	.163					.547
コミ3 授業中友だちの意見や感想を最後まで聞いている		.294				.517
コミ7 授業中話し合い教え合いで自分の考えが深まる				.173	.139	.465
互高3 友だちが協力してくれることでやる気になる	.434					.447
コミ8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがよくある	.227				.151	.396

因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

1回目後にカットした質問項目

互高2 クラスの中に目標としている仲間がいる	.338	.230		-.150	.149	.116
規範8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	.326		.115			.213
コミ6 授業中友だちや先生に自分の考えを分かりやすく伝えている			.105	.319	.340	.120
互高8 クラスで活動していて自分のよいところに気がつくことがある	.291	.222				.330
互高1 クラスで話し合う場面では真剣に話し合う	.156		.233	.169	.162	.261

2回目後にカットした質問項目

規範6 教室にゴミが落ちているのに気づいたら拾う			.294			.324
--------------------------	--	--	------	--	--	------

3回目後にカットした質問項目

帰属7 教室のけいじ物がはがれていたら直す		.202				.179
自信4 授業中自分の意見が大切にされてうれしかったことがある		-.162	.344	.194	.133	.231
自信6 授業中に先生からほめられてうれしかったことがある		-.160	.296		.299	.181
互高6 係や委員会などの仕事に工夫をしながら取り組んでいる		.163	.168	.128		.300

このように、視点ごとに作成した調査用質問項目には、分析結果の中で違う因子として属されるものいくつかあったので、調査の信頼性を確認するため、視点ごとの8問で、因子分析を行った。

(2) 各視点で設定した調査用質問項目 8 問ごとの整合性について ～因子分析～

視点ごとに設定した調査用質問項目が、学業指導の 6 つの視点として相応しいものであるかどうか（整合性）を確認するために、各視点で調査した 10 問のうち「自分を評価する質問項目」8 問を分析対象として、因子数の設定をせずに、6 つの視点ごとに因子分析を行った。その結果が下表 6 である。【第 3 章 2 - (2)】

表 6: 視点ごとの因子分析の結果（因子数の設定無し）

集団づくりの3視点	
帰属意識	因子 1
帰属 3 クラスの人みんなが仲間だ	. 772
帰属 5 クラスの大切な一員だ	. 750
帰属 2 クラスのために役に立ちたい	. 718
帰属 1 このクラスの一員でよかった	. 688
帰属 8 教室にいと気持ち落ち着く	. 680
帰属 4 学校行事では準備をふくめて進んで取り組んでいる	. 638
帰属 6 学校行事でクラスの人みんなと感動する	. 610
帰属 7 教室のけいじ物がはがれていたら直す	. 429

因子抽出法：最尤法

授業づくりの3視点	
学習への自信	因子 1
自信 4 授業中自分の意見が大切にされてうれしかったことがある	. 740
自信 8 やる気をもって授業に取り組んでいる	. 707
自信 6 授業中に先生からほめられてうれしかったことがある	. 691
自信 3 よく理解できなかったところを聞いたり復習したりする	. 668
自信 2 授業中むずかしい問題が解けてうれしかったことがある	. 646
自信 7 授業中に自信をもって自分の意見を言うことができる	. 618
自信 1 授業の内容をだいたい理解している	. 599
自信 5 授業中でできるだけ自分ひとりの力で問題を解決しようとしている	. 522

因子抽出法：最尤法

規範意識	
規範意識	因子 1
規範 4 学校やクラスのルールを守っている	. 750
規範 1 学校やクラスのルールを守ることが大切だ	. 652
規範 5 教室のつづえやロッカーを大切に使っている	. 607
規範 7 相手の気持ちをききつづけることを言わない	. 597
規範 2 係や委員会の仕事があれば忘れずにやる	. 579
規範 3 授業が始まる前にいつも着席している	. 573
規範 6 教室にゴミが落ちていたのに気づいたら拾う	. 540
規範 8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	. 529

因子抽出法：最尤法

コミュニケーション能力	因子	
	1	2
	聞・話合	話す
コミ 5 授業中友だちの意見や考えが自分とはちがっていてもよく聞く	. 873	-. 121
コミ 3 授業中友だちの意見や感想を最後まで聞いている	. 733	. 037
コミ 4 授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない	. 603	-. 128
コミ 8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがよくある	. 450	. 320
コミ 7 授業中話し合い教え合いで自分の考えが深まる	. 426	. 380
コミ 2 授業中発言することが楽しい	-. 152	. 912
コミ 1 授業中安心して発言することができる	-. 094	. 860
コミ 6 授業中友だちや先生に自分の考えを分かりやすく伝えている	. 355	. 436
因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法		因子相関行列 . 605

互いに高め合う意識	
互いに高め合う意識	因子 1
互高 4 学校行事でクラスやチームの目標を達成するために努力している	. 748
互高 3 友だちが協力してくれることでやる気になる	. 700
互高 7 クラスのみんなのよいところを知っている	. 696
互高 6 係や委員会などの仕事に工夫をしながら取り組んでいる	. 671
互高 1 クラスで話し合う場面では真剣に話し合う	. 668
互高 8 クラスで活動していて自分のよいところに気がつくことがある	. 654
互高 5 友だちの意見を聞いて自分の意見を考え直すことがある	. 592
互高 2 クラスの中に目標としている仲間がいる	. 582

因子抽出法：最尤法

学習への取組	因子	
	1	2
	先生の支援	学習状況
取組 2 先生の手助けによって分からないことを解決することがある	. 854	-. 133
取組 1 勉強のことで先生に気軽に質問することができる	. 690	-. 009
取組 4 先生に話を聞いてもらって勉強の仕方を見直したことがある	. 463	. 257
取組 3 提出物に先生が書いてくれたことがその後の学習に役立っている	. 449	. 312
取組 6 家で自分の苦手なところを勉強している	-. 105	. 761
取組 7 授業中むずかしい問題を出されるとやる気がでる	. 036	. 621
取組 8 学習の内容や方法を自分で選べる授業は取り組みやすい	. 105	. 534
取組 5 自分の勉強で得意なところと苦手なところがよく分かっている	-. 002	. 458
因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法		因子相関行列 . 678

この分析結果をまとめると次の表 7 のようになる。

表 7：因子分析結果のまとめ

1 因子となった視点	2 因子になった視点
「帰属意識」 「規範意識」 「互いに高め合う意識」 「学習への自信」	「コミュニケーション能力」 ⇒「聞く・話し合う」、「話す」 「学習への取組」 ⇒「先生の支援」、「学習状況」

1 因子となった4つの視点については、属する8問が相互に関連しており、一貫性があることを示している。よって、これらの調査用質問項目は、それぞれの視点から見た学業指導の状況や成果を示す子どもの姿と捉えてよいと考えられる。

一方、2 因子となった2つの視点のうち、「コミュニケーション能力」では、第1 因子として「聞く・話し合う」、第2 因子として「話す」と名付けることのできる2 因子が得られた。このように2つの因子に分かれたことは、「コミュニケーション能力」が「聞く」と「話す」ことの両面により成り立っていることが原因と考えられる。よって、「コミュニケーション能力」として調査した8問に、これら2つの因子がバランスよく含まれると言え、「コミュニケーション能力を育む授業づくり」の状況や成果を示す子どもの姿として捉えてよいと考えられる。

「学習への取組」についても、第1 因子として「先生の支援」、第2 因子として「学習状況」と名付けることができる2 因子が得られた。「一人一人の実態に配慮した授業づくり」の視点においては、他の視点と比べて教師の直接的な関わりによる部分が強いと、調査用質問項目の作成の際に、教師の直接的な支援と子どもたちの学習状況の両面で作成した。このことが、2つの因子に分かれた原因と考えられる。本視点においては、先述のように教師の支援の成果について聞くことが不可欠であり、「学習への取組」として調査した8問は、「一人一人の実態に配慮した授業づくり」の状況や成果を示す子どもの姿として捉えてよいと考えられる。

以上のことから、因子分析の結果も踏まえ、調査用質問項目として作成した各8問の、学業指導のそれぞれの視点との整合性を確認することができた。

(3) 質問項目の信頼性分析 ～学業指導尺度の作成に向けて～

ア 視点別調査用質問項目8問の信頼性（クロンバックのアルファ係数）

因子分析により、本調査で用いた調査用質問項目と、学業指導の2本の柱及び6つの視点との整合性を確認することができた。よって、これらの調査用質問項目を用いることで、学業指導の状況や成果を把握するための客観的なデータを得ることができると考えられる。そこで、本調査研究では、抽出調査の結果の分析に基づき、各学校において教師の学業指導の状況や成果を子どもの姿から測ることができる「学業指導尺度」を作成した。

その際、回答者のアンケート回答への負担や、結果を入力する教員の負担を考慮して、各視点5問×6視点の計30問にすることとした。

以下、各視点の調査用質問項目の8問からそれぞれ信頼性の高い5問を精選した手順を述べる。

「測定尺度が信頼できるか否かは、繰り返し測定しても、また、誰が測定しても同じ結果が得られることである。」^{*3}とされている。そこで、信頼性の高い尺度を作成する際には、繰り返し調査を行って結果を確かめるのが望ましいが、本調査研究では、繰り返しのテストなしに尺度の信頼性を確かめるクロンバックのアルファ係数（以下、アルファ係数）を用いた。このアルファ係数とは、例えば問1の回答結果が高ければ問2の回答結果も高いなどの関係があるかどうかや、問1と他の質問回答の合計との関係を調べることで、測定尺度が信頼できるか否かを確認することができる分析値である。できるだけ信頼性の高い尺度となるよう、この値を基に質問項目を精選して尺度とすることとした。

*3：「SPSS による統計解析入門」小田利勝著、2007 年。プレアデス出版（以下、*8 まで同じ）

はじめに、各視点の調査用質問項目8問のアルファ係数を求めた。

その結果が次頁の表8である。 【第3章2-（3）】

表 8：視点別調査用質問項目 8 問の信頼性（クロンバックのアルファ係数）

集団づくりの3視点

帰属意識

信頼性統計量

クロンバックの 7α係数	標準化された項目に基づいた クロンバックの 7α係数	項目の数
.856	.861	8

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
25.53	20.745	4.555	8

項目統計量

項目合計統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除された場合の 尺度の平均値	項目が削除された場合の 尺度の分散	修正済み項目 合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除された場合の クロンバックの 7α係数
帰属 3 クラスの人みんなが仲間だ	3.43	.736	3543	22.10	16.139	.687	.518	.829
帰属 5 クラスの大切な一員だ	3.00	.832	3543	22.53	15.625	.673	.486	.829
帰属 2 クラスのために役に立ちたい	3.31	.758	3543	22.22	16.125	.664	.455	.831
帰属 8 教室にしていると気持ちが落ち着く	3.03	.880	3543	22.50	15.597	.630	.425	.835
帰属 4 学校行事では準備をふくめて進んで取り組んでいる	3.32	.743	3543	22.21	16.554	.602	.395	.838
帰属 1 このクラスの一員でよかった	3.51	.682	3543	22.02	16.890	.604	.452	.839
帰属 6 学校行事でクラスの人みんなと感動する	3.14	.887	3543	22.39	15.897	.575	.341	.842
帰属 7 教室のけいじ物がはがれていたら直す	2.80	.907	3543	22.73	16.850	.413	.206	.863

規範意識

信頼性統計量

クロンバックの 7α係数	標準化された項目に基づいた クロンバックの 7α係数	項目の数
.814	.821	8

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
26.35	13.882	3.726	8

項目統計量

項目合計統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除された場合の 尺度の平均値	項目が削除された場合の 尺度の分散	修正済み項目 合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除された場合の クロンバックの 7α係数
規範 4 学校やクラスのルールを守っている	3.38	.663	3547	22.97	10.633	.650	.460	.777
規範 1 学校やクラスのルールを守ることが大切だ	3.65	.577	3547	22.70	11.342	.568	.356	.790
規範 7 相手の気持ちをききづけることを言わない	3.30	.714	3547	23.05	10.804	.548	.309	.790
規範 5 教室のつくえやロッカーを大切に使っている	3.60	.616	3547	22.74	11.268	.540	.304	.792
規範 2 係や委員会の仕事があれば忘れずに言う	3.39	.662	3547	22.96	11.191	.508	.280	.796
規範 3 授業が始まる前にいつも着席している	3.24	.719	3547	23.11	11.004	.495	.291	.798
規範 6 教室にゴミが落ちているのに気づいたら拾う	2.85	.825	3547	23.50	10.525	.500	.261	.799
規範 8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	2.95	.835	3547	23.40	10.521	.491	.267	.801

互いに高め合える意識

信頼性統計量

クロンバックの 7α係数	標準化された項目に基づいた クロンバックの 7α係数	項目の数
.859	.863	8

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
25.28	21.272	4.612	8

項目統計量

項目合計統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除された場合の 尺度の平均値	項目が削除された場合の 尺度の分散	修正済み項目 合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除された場合の クロンバックの 7α係数
互高 4 学校行事でクラスやチームの目標を達成するために努力している	3.31	.751	3553	21.98	16.570	.677	.484	.834
互高 7 クラスのみんなのよいところを知っている	3.18	.828	3553	22.10	16.263	.647	.427	.836
互高 3 友だちが協力してくれることでやる気になる	3.50	.719	3553	21.79	16.926	.648	.460	.838
互高 6 係や委員会などの仕事に工夫をしながら取り組んでいる	3.02	.807	3553	22.26	16.565	.618	.413	.840
互高 1 クラスで話し合う場面では真剣に話し合う	3.19	.744	3553	22.09	16.983	.609	.394	.841
互高 8 クラスで活動していて自分のよいところに気がつくことがある	2.69	.894	3553	22.60	16.143	.603	.394	.842
互高 5 友だちの意見を聞いて自分の意見を考え直すことがある	3.34	.741	3553	21.95	17.416	.535	.323	.849
互高 2 クラスの中に目標としている仲間がいる	3.06	.985	3553	22.23	16.060	.537	.316	.853

授業づくりの3視点

学習への自信

信頼性統計量

クロンバッハの 7点7分係数	標準化された項目に基づいた クロンバッハの 7点7分係数	項目の数
.852	.853	8

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
24.45	23.147	4.811	8

項目統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除された場合の尺度の平均値	項目が削除された場合の尺度の分散	修正済み項目合計相関	重相関の2乗	項目が削除された場合のクロンバッハの7点7分係数
自信4 授業中自分の意見が大切にされてうれしかったことがある	2.88	.941	3550	21.57	17.012	.676	.508	.824
自信8 やる気をもって授業に取り組んでいる	3.10	.805	3550	21.35	18.023	.654	.438	.828
自信6 授業中に先生からほめられてうれしかったことがある	3.00	.954	3550	21.44	17.297	.622	.454	.831
自信3 よく理解できなかったところを聞いたり復習したりする	3.02	.869	3550	21.42	17.894	.612	.396	.832
自信2 授業中むずかしい問題が解けてうれしかったことがある	3.49	.773	3550	20.96	18.648	.584	.380	.836
自信1 授業の内容をだいたい理解している	3.19	.737	3550	21.25	19.013	.559	.346	.839
自信7 授業中に自信をもって自分の意見を言うことができる	2.52	.962	3550	21.93	17.670	.563	.355	.839
自信5 授業中できるだけ自分ひとりの力で問題を解決しようとしている	3.24	.785	3550	21.21	19.207	.483	.262	.847

項目合計統計量

コミュニケーション能力

信頼性統計量

クロンバッハの 7点7分係数	標準化された項目に基づいた クロンバッハの 7点7分係数	項目の数
.851	.853	8

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
24.69	21.108	4.594	8

項目統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除された場合の尺度の平均値	項目が削除された場合の尺度の分散	修正済み項目合計相関	重相関の2乗	項目が削除された場合のクロンバッハの7点7分係数
コミ7 授業中話し合い教え合いで自分の考えが深まる	3.08	.840	3534	21.60	15.855	.680	.506	.822
コミ6 授業中友だちや先生に自分の考えを分かりやすく伝えている	3.05	.832	3534	21.63	15.974	.668	.458	.823
コミ8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがある	3.18	.825	3534	21.51	16.115	.651	.464	.825
コミ3 授業中友だちの意見や感想を最後まで聞いている	3.34	.722	3534	21.34	16.940	.613	.479	.831
コミ1 授業中安心して発言することができる	2.80	.911	3534	21.88	15.926	.598	.516	.832
コミ5 授業中友だちの意見や考えが自分とはちがっていてもよく聞く	3.49	.663	3534	21.20	17.412	.588	.497	.835
コミ2 授業中発言することが楽しい	2.33	.976	3534	22.36	15.696	.576	.518	.836
コミ4 授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない	3.41	.756	3534	21.28	18.126	.374	.235	.856

項目合計統計量

学習への取組

信頼性統計量

クロンバッハの 7点7分係数	標準化された項目に基づいた クロンバッハの 7点7分係数	項目の数
.818	.816	8

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
23.42	23.491	4.847	8

項目統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除された場合の尺度の平均値	項目が削除された場合の尺度の分散	修正済み項目合計相関	重相関の2乗	項目が削除された場合のクロンバッハの7点7分係数
取組3 提出物に先生が書いてくれたことがその後の学習に役立っている	2.89	.927	3546	20.53	17.746	.626	.421	.784
取組4 先生に話を聞いてもらって勉強の仕方を見直したことがある	2.79	.968	3546	20.63	17.763	.588	.386	.789
取組2 先生の手助けによって分からないことを解決することができる	3.06	.883	3546	20.36	18.522	.552	.392	.795
取組1 勉強のことで先生に気軽に質問することができる	2.84	.936	3546	20.58	18.299	.539	.362	.797
取組8 学習の内容や方法を自分で選べる授業は取り組みやすい	3.12	.853	3546	20.31	18.803	.535	.305	.797
取組7 授業中むずかしい問題を出されるとやる気が出てくる	2.48	1.024	3546	20.94	17.801	.537	.327	.797
取組6 家で自分の苦手なところを勉強している	2.75	.954	3546	20.67	18.270	.528	.323	.798
取組5 自分の勉強で得意なところと苦手なところがよく分かっている	3.48	.738	3546	19.94	20.424	.378	.172	.816

項目合計統計量

各視点のアルファ係数は、「0.816～0.863」の範囲内の値となった。アルファ係数は0～1の間の値をとり、1に近いほど信頼性が高いことを表す。「一般にアルファが0.7以上であれば信頼性の高い尺度とみなされ、0.8以上あれば文句なしと判断される」*4ので、これらの8問は内的整合性が高く、尺度としての信頼性が十分にあることを確認することができた。

因子分析や信頼性分析の結果を踏まえ、各視点の調査用質問項目 8 問の中から 5 問を選び、学業指導尺度「学級と学習に関するアンケート」の 30 問とした。

それが、下図 5 である。【第 2 章 p. 11】

学級と学習に関するアンケート		クラス		番 号	
次の 1～30 は、学級（学校生活）や 学習（授業）に関する質問です。 あなたが思っていることや行っていることに一番近いものを、それぞれ 1 つだけ選び、数字を○でかこんでください。 「4：あてはまる」 「3：ややあてはまる」 「2：あまりあてはまらない」 「1：あてはまらない」					
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	わたしは、このクラスの一員でよかったと思う。	4	3	2	1
2	わたしは、クラスのために役に立ちたいと思っている。	4	3	2	1
3	わたしは、クラスの人みんなを仲間だと思っている。	4	3	2	1
4	運動会や合唱コンクール・学校祭などの行事で、クラスの人みんなと感動することがある。	4	3	2	1
5	わたしは、教室にいと気持ちが落ち着く。	4	3	2	1
6	わたしは、授業が始まる前にいつも着席している。	4	3	2	1
7	わたしは、学校やクラスのルールを守っている。	4	3	2	1
8	わたしは、教室の机やロッカーを大切に使っている。	4	3	2	1
9	わたしは、相手の気持ちを傷つけることを、言わないようにしている。	4	3	2	1
10	わたしは、クラスの人とルールについて互いに注意し合っているとと思う。	4	3	2	1
11	友だちが励ましてくれることで、やる気になることがある。	4	3	2	1
12	わたしは、運動会や合唱コンクール・学校祭などの行事で、クラスやチームの目標を達成するために努力していると思う。	4	3	2	1
13	友だちの意見を聞いて、自分の意見を考え直すことがある。	4	3	2	1
14	わたしは、係や委員会などの仕事に工夫をしながら取り組んでいる。	4	3	2	1
15	わたしは、クラスの人みんなのよいところを知っている。	4	3	2	1
16	授業でよく理解できなかったところを、そのままにせず、先生や友だちに聞いたり、後で復習したりするようにしている。	4	3	2	1
17	授業中、自分の意見が大切にされてうれしかったことがある。	4	3	2	1
18	わたしは、授業中に先生からほめられてうれしかったことがある。	4	3	2	1
19	わたしは、やる気をもって授業に取り組んでいる。	4	3	2	1
20	わたしは、授業中、難しい問題を出されると、やる気が出てくる。	4	3	2	1
21	わたしは、授業中、安心して発言することができる。	4	3	2	1
22	わたしは、授業中、友だちの意見や感想を最後まで聞いている。	4	3	2	1
23	授業中、友だちや先生に、自分の考えを分かりやすく伝えようとしている。	4	3	2	1
24	わたしは、授業中、話し合ったり教え合ったりすることで、自分の考えが深まることがある。	4	3	2	1
25	わたしは、話し合いの中でみんなの意見がまとまって、よかったと思うことがよくある。	4	3	2	1
26	わたしは、勉強のことで先生に気軽に質問することができる。	4	3	2	1
27	わたしは、授業中、先生の手助けによって分からないことやできないことを解決することがある。	4	3	2	1
28	ノートやワークシートなどの提出物に先生が書いてくれたコメントが、その後の学習に役立っている。	4	3	2	1
29	わたしは、先生に話を聞いてもらって、勉強の仕方を見直したことがある。	4	3	2	1
30	学習の内容や方法を自分で選べる授業は、取り組みやすい。	4	3	2	1

図 5：学業指導尺度

因子分析の結果を基に、調査用質問項目を尺度とするに際して、視点を変更した質問項目は次のとおりである。

- ・取組 7 「授業中むずかしい問題を出されるとやる気が出てくる」は、

「学習への取組」から「学習への自信」（尺度 No. 20）へ変更

なお、栃木県教育委員会発行の「学業指導の充実に向けて」（平成 24 年 3 月）においても、「自信をもたせる授業づくり」の項に、「多少難解な課題に挑戦させるなど、最後までじっくりと取り組ませ、児童生徒に成功体験を積みませましょう。」という手立てが示されている。

また、表 6 に示したように、「コミュニケーション能力」と「一人一人の実態に配慮（学習への取組）」の各 8 問は、因子分析によりそれぞれ 2 つの因子に分かれていたが、尺度の作成に際しては、そのバランスに考慮して信頼性の高い質問項目を各視点 5 問選択した。

なお、回答によって受け止め方の差異が生じることを防ぐために、尺度として決定する際に質問項目の文言を見直した。変更点は以下のとおりである。

（互い高め合う意識）「わたしは、友達が協力してくれることで、やる気になることがある。」
変更後⇒「わたしは、友達が励ましてくれることで、やる気になることがある。」

「協力して」を「励まして」に変更したのは、回答者にとって、「協力して」という場合は、行動や言葉など、イメージされる協力の手段が多様化してしまうためであり、また、「励まして」の方が声かけの場面などを具体的にイメージしやすいと考えたからである。

イ 作成した「学業指導尺度」各視点 5 問の信頼性（クロンバックのアルファ係数）

最後に、学業指導尺度として決定した各視点 5 問のアルファ係数を確認したところ、次ページの表 9【第 3 章 2-(3)-2】に示すとおりとなった。表にあるように、作成した尺度の内的整合性を示すアルファ係数は「0.748～0.823」であり、先に表 8 で示した調査用質問項目 8 問間の係数よりも低い値となっているが、これは、アルファ係数が一般に項目数が多いと高くなり、少ないと低くなる性質をもつためであると考えられる。すなわち、8 問から 5 問に減らしてもなおこの値を保っていると捉えるべきものである。

表 9：作成した「学業指導尺度」各 5 問の信頼性（クロンバックのアルファ係数）

帰属意識

信頼性統計量		
クロンバークの α 係数	標準化された項目に 基づいた クロンバークの α 係数	項目の数
.816	.822	5

尺度の統計量			
平均値	分散	標準偏差	項目の数
16.41	9.038	3.006	5

項目統計量				項目合計統計量				
	平均値	標準偏差	度数	項目が削除 された場合 の尺度の平 均値	項目が削除 された場合 の尺度の分 散	修正済み項 目合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除 された場合 のクロンバーク の α 係数
帰属 1 このクラスの一員でよかった	3.51	.682	3557	12.90	6.413	.625	.423	.777
帰属 2 クラスのために役に立ちたい	3.31	.758	3557	13.10	6.155	.614	.391	.777
帰属 3 クラスの人みんなが仲間だ	3.43	.736	3557	12.98	6.056	.674	.478	.761
帰属 6 学校行事でクラスの人みんなと感動する	3.14	.887	3557	13.27	5.963	.528	.284	.807
帰属 8 教室にいると気持ちが落ち着く	3.03	.879	3557	13.38	5.669	.620	.396	.776

規範意識

信頼性統計量		
クロンバークの α 係数	標準化された項目に 基づいた クロンバークの α 係数	項目の数
.740	.748	5

尺度の統計量			
平均値	分散	標準偏差	項目の数
16.46	6.239	2.498	5

項目統計量				項目合計統計量				
	平均値	標準偏差	度数	項目が削除 された場合 の尺度の平 均値	項目が削除 された場合 の尺度の分 散	修正済み項 目合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除 された場合 のクロンバーク の α 係数
規範 3 授業が始まる前にいつも着席している	3.24	.719	3551	13.23	4.280	.484	.280	.702
規範 4 学校やクラスのルールを守っている	3.38	.663	3551	13.09	4.181	.597	.375	.662
規範 5 教室のつくえやロッカーを大切に使用している	3.60	.616	3551	12.86	4.554	.497	.261	.700
規範 7 相手の気持ちをききつづけることを言わない	3.30	.714	3551	13.17	4.172	.534	.290	.683
規範 8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	2.95	.836	3551	13.51	4.074	.435	.212	.729

互いに高め合う意識

信頼性統計量		
クロンバークの α 係数	標準化された項目に 基づいた クロンバークの α 係数	項目の数
.810	.812	5

尺度の統計量			
平均値	分散	標準偏差	項目の数
16.34	8.436	2.904	5

項目統計量				項目合計統計量				
	平均値	標準偏差	度数	項目が削除 された場合 の尺度の平 均値	項目が削除 された場合 の尺度の分 散	修正済み項 目合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除 された場合 のクロンバーク の α 係数
互高 3 友だちが協力してくれることでやる気になる	3.50	.720	3563	12.85	5.772	.621	.414	.767
互高 4 学校行事でクラスやチームの目標を達成するために努力している	3.31	.750	3563	13.04	5.556	.655	.440	.756
互高 5 友だちの意見を聞いて自分の意見を考え直すことがある	3.34	.742	3563	13.01	5.890	.554	.316	.786
互高 6 係や委員会などの仕事に工夫をしながら取り組んでいる	3.02	.807	3563	13.32	5.618	.567	.339	.783
互高 7 クラスのみんなのよいところを知っている	3.18	.828	3563	13.16	5.439	.598	.365	.774

学習への自信

信頼性統計量

クロンバークの α 係数	標準化された項目に基 づいた クロンバークの α 係数	項目の数
.811	.814	5

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
14.48	12.094	3.478	5

項目統計量

項目合計統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除 された場合 の尺度の平 均値	項目が削除 された場合 の尺度の分 散	修正済み項 目合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除さ れた場合の クロンバークの α 係数
自信 3 よく理解できなかったところを聞いたり復習したりする	3.02	.869	3553	11.46	8.398	.584	.357	.779
自信 4 授業中自分の意見が大切にされてうれしかったことがある	2.88	.941	3553	11.60	7.799	.649	.464	.759
自信 6 授業中に先生からほめられてうれしかったことがある	3.00	.954	3553	11.48	7.965	.598	.422	.775
自信 8 やる気をもって授業に取り組んでいる	3.10	.805	3553	11.39	8.528	.621	.394	.771
取組 7 授業中むずかしい問題を出されるとやる気が出てくる	2.48	1.024	3553	12.00	7.839	.560	.328	.789

コミュニケーション能力

信頼性統計量

クロンバークの α 係数	標準化された項目に基 づいた クロンバークの α 係数	項目の数
.822	.823	5

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
15.45	10.016	3.165	5

項目統計量

項目合計統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除 された場合 の尺度の平 均値	項目が削除 された場合 の尺度の分 散	修正済み項 目合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除さ れた場合の クロンバークの α 係数
コミ 1 授業中安心して発言することができる	2.80	.911	3546	12.65	6.650	.540	.299	.812
コミ 3 授業中友だちの意見や感想を最後まで聞いている	3.34	.723	3546	12.11	7.350	.547	.308	.806
コミ 6 授業中友だちや先生に自分の考えを分かりやすく伝えている	3.05	.832	3546	12.40	6.536	.655	.431	.775
コミ 7 授業中話し合い教え合いで自分の考えが深まる	3.08	.840	3546	12.37	6.367	.695	.499	.763
コミ 8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがよくある	3.18	.825	3546	12.27	6.574	.653	.451	.776

学習への取組

信頼性統計量

クロンバークの α 係数	標準化された項目に基 づいた クロンバークの α 係数	項目の数
.786	.785	5

尺度の統計量

平均値	分散	標準偏差	項目の数
14.70	11.250	3.354	5

項目統計量

項目合計統計量

	平均値	標準偏差	度数	項目が削除 された場合 の尺度の平 均値	項目が削除 された場合 の尺度の分 散	修正済み項 目合計相関	重相関の 2 乗	項目が削除さ れた場合の クロンバークの α 係数
取組 1 勉強のことで先生に気軽に質問することができる	2.84	.936	3551	11.86	7.485	.564	.352	.745
取組 2 先生の手助けによって分からないことを解決することがある	3.06	.883	3551	11.64	7.535	.606	.392	.732
取組 3 提出物に先生が書いてくれたことがその後の学習に役立っている	2.89	.927	3551	11.81	7.319	.612	.393	.729
取組 4 先生に話を聞いてもらって勉強の仕方を見直したことがある	2.79	.967	3551	11.91	7.243	.590	.370	.736
取組 8 学習の内容や方法を自分で選べる授業は取り組みやすい	3.12	.853	3551	11.59	8.347	.441	.197	.782

(4) クラスの「意識や状況」が一人一人の「意識や行動」に与える影響について ～重回帰分析～

栃木県教育委員会発行「学業指導の充実に向けて」（平成 24 年 3 月）の中では、「学業指導とは、それぞれの学級を『学びに向かう集団』に高めながら、児童生徒一人一人が自らの力で様々な不適応を解消し社会性を身に付けたり、意欲的に学習活動に取り組んで学力を向上させたりして自己実現（社会的自立）を図っていくための指導・援助のことです。」と述べられている。

そこで本調査研究では、「学級を学びに向かう集団に高める」とことと「児童生徒一人一人の成長」との関連について、抽出調査によって得られたデータを重回帰分析という統計的手法を用いて分析し、検証することにした。

ここで用いた重回帰分析とは、「ある変数の値を他の変数の値で予測したり、ある変数にどのような変数がどのように影響しているかを分析するときに用いられる」*5 統計的な分析手法である。影響を与えると考えられる数値を説明変数、影響を受ける側の数値を従属変数と言い、説明変数が 1 つの場合を単回帰分析、2 つ以上の場合を重回帰分析と言う。

重回帰分析を行うに当たり、調査用質問項目の信頼性分析の結果から、各視点で「自分を評価する質問項目」8 問の内的整合性が十分にあったので、各視点で自分を評価した調査用質問項目 8 問の一人一人の回答の合計値を、一人一人の「意識や行動」を示す従属変数とした。その際、変数はそれぞれ (1) で行った因子分析の結果から得られた 6 因子である「帰属意識」、「規範意識」、「互いに高め合う意識」、「学習への自信」、「コミュニケーション能力」、「学習への取組」の名称を用いる。

また、クラスの「意識や状況」は、視点ごとに、一人一人がクラスを評価した質問項目 2 問についてクラス単位での平均を求め、その値を説明変数として分析に用いた。その上で、重回帰分析により、クラスの「意識や状況」（客観的な評価の回答）が、一人一人の「意識や行動」（主観的な評価の回答）にどれくらい影響があるか調べた。

今回の重回帰分析では、例えば下の図 6 のように、一人一人の「帰属意識」を対象（従属変数）とした場合に、クラスの「帰属意識」、「規範意識」、「互いに高め合う意識」、「学習への自信」、「コミュニケーション能力」、「学習への取組」の 6 つの視点（説明変数）が、それぞれのどれくらい影響があるか、その強さを求めた。他の 5 つの一人一人の「意識や行動」についても同様に分析した。

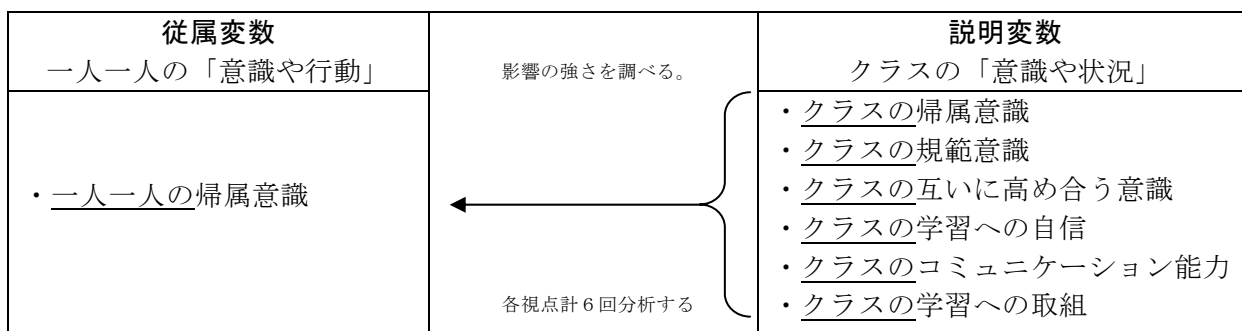


図 6

栃木県教育委員会平成 21 年 1 月発行の教職員用リーフレット「あなたは、学業指導を知っていますか」においては、「“集団の中で学ぶ”という学校教育の特質を生かして、子どもたち一人一人を成長させるという視点が大切」、「どのような集団に属しているかで、子どもの成長は大きく異なります」という考え方がされている。ここで行う重回帰分析は、こうしたクラスの「意識や状況」と一人一人の「意識や行動」との間の影響関係を調べるという目的をもつ。

ア 重回帰分析の結果

その結果が下表 10：重回帰分析の結果である。【第 3 章 2－（4）】

表10: 重回帰分析の結果

一人一人の「帰属意識」を高めるクラスの「意識や状況」

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	.696	.122		5.701	.000		
	クラスの帰属意識	.452	.090	.192	5.004	.000	.171	5.858
	クラスの互いに高め合える意識	.269	.086	.124	3.144	.002	.162	6.160
	クラスの規範意識	.054	.033	.032	1.636	.102	.679	1.472

a. 従属変数 一人一人の帰属意識

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	1.672	.093		17.996	.000		
	クラスの学習への自信	.424	.055	.234	7.729	.000	.284	3.516
	クラスのコミュニケーション能力	.179	.043	.113	4.170	.000	.354	2.827
	クラスの学習への取組	-.108	.040	-.066	-2.731	.006	.441	2.267

a. 従属変数 一人一人の帰属意識

一人一人の「規範意識」を高めるクラスの「意識や状況」

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	1.852	.102		18.081	.000		
	クラスの互いに高め合える意識	.250	.072	.141	3.489	.000	.163	6.141
	クラスの規範意識	.162	.028	.115	5.837	.000	.679	1.472
	クラスの帰属意識	.051	.076	.026	.671	.502	.171	5.843

a. 従属変数 一人一人の規範意識

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	2.181	.077		28.503	.000		
	クラスの学習への自信	.446	.045	.300	9.881	.000	.286	3.498
	クラスのコミュニケーション能力	-.005	.035	-.004	-0.132	.895	.353	2.830
	クラスの学習への取組	-.072	.033	-.054	-2.194	.028	.442	2.263

a. 従属変数 一人一人の規範意識

一人一人の「互いに高め合う意識」を高めるクラスの「意識や状況」

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	.630	.123		5.124	.000		
	クラスの互いに高め合える意識	.461	.086	.210	5.339	.000	.162	6.176
	クラスの帰属意識	.367	.091	.154	4.034	.000	.170	5.874
	クラスの規範意識	-.057	.033	-.033	-1.707	.088	.678	1.475

a. 従属変数 一人一人の互いに高め合う意識

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	1.213	.092		13.161	.000		
	クラスの学習への自信	.410	.054	.223	7.556	.000	.286	3.501
	クラスのコミュニケーション能力	.178	.043	.111	4.193	.000	.353	2.836
	クラスの学習への取組	.046	.039	.028	1.161	.246	.442	2.262

a. 従属変数 一人一人の互いに高め合う意識

一人一人の「学習への自信」を高めるクラスの「意識や状況」

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	.767	.130		5.879	.000		
	クラスの互いに高め合える意識	.530	.091	.231	5.807	.000	.163	6.139
	クラスの帰属意識	.248	.096	.100	2.572	.010	.171	5.844
	クラスの規範意識	-.085	.035	-.047	-2.414	.016	.680	1.470

a. 従属変数 一人一人の学習への自信

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	.733	.095		7.735	.000		
	クラスの学習への自信	.412	.056	.214	7.416	.000	.288	3.470
	クラスの学習への取組	.322	.040	.186	7.991	.000	.445	2.248
	クラスのコミュニケーション能力	.029	.044	.017	.660	.510	.356	2.812

a. 従属変数 一人一人の学習への自信

一人一人の「コミュニケーション能力」を高めるクラスの「意識や状況」

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	.719	.124		5.795	.000		
	クラスの帰属意識	.395	.092	.166	4.301	.000	.171	5.848
	クラスの互いに高め合える意識	.310	.087	.141	3.567	.000	.163	6.144
	クラスの規範意識	.027	.034	.016	.804	.422	.680	1.471

a. 従属変数 一人一人のコミュニケーション能力

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	1.118	.092		12.132	.000		
	クラスの学習への自信	.438	.054	.238	8.096	.000	.288	3.478
	クラスのコミュニケーション能力	.177	.042	.111	4.182	.000	.355	2.817
	クラスの学習への取組	.026	.039	.015	.652	.515	.445	2.249

a. 従属変数 一人一人のコミュニケーション能力

一人一人の「学習への取組」を高めるクラスの「意識や状況」

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	.745	.132		5.637	.000		
	クラスの互いに高め合える意識	.395	.093	.171	4.274	.000	.162	6.157
	クラスの帰属意識	.334	.098	.133	3.418	.001	.171	5.860
	クラスの規範意識	-.067	.036	-.036	-1.861	.063	.680	1.470

a. 従属変数 一人一人の学習への取組

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	.654	.096		6.838	.000		
	クラスの学習への自信	.408	.056	.211	7.237	.000	.286	3.498
	クラスの学習への取組	.306	.041	.176	7.491	.000	.442	2.263
	クラスのコミュニケーション能力	.032	.044	.019	.728	.466	.354	2.827

a. 従属変数 一人一人の学習への取組

上表 10 中に示した標準化係数ベータは、説明変数が従属変数に与える影響の大きさを示している。今回の調査では、「帰属意識」、「規範意識」、「互いに高め合う意識」、「学習への自信」、「コミュニケーション能力」、「学習への取組」のように扱う変数が異なっているため、回数を分けてそれぞれ分析を行ったが、標準化係数ベータは、平均を「0」、標準偏差を「1」として補正しているため、それぞれ行った分析の結果を直接比較することができる。およそ「0.100」以上で統計的に有意な結果となる。

イ まとめ

重回帰分析の結果（ベータ）を視点ごとに整理したものを次頁の図 7 に示す。

一人一人の意識や行動		クラス(集団)の意識や状況		一人一人の意識や行動		クラス(集団)の意識や状況
帰属意識	0.234	クラス全体の学習への自信を高める		学習への自信	0.231	クラスの互いに高め合う意識を高める
	0.192	クラスの帰属意識を高める			0.214	クラス全体の学習への自信を高める
	0.124	クラスの互いに高め合う意識を高める			0.186	クラス全体の学習への取組を高める
	0.113	クラス全体のコミュニケーション能力を高める			0.100	クラスの帰属意識を高める
	-0.066	クラス全体の学習への取組を高める			-0.047	クラスの規範意識を高める
規範意識	0.300	クラス全体の学習への自信を高める		コミュニケーション能力	0.238	クラス全体の学習への自信を高める
	0.141	クラスの互いに高め合う意識を高める			0.166	クラスの帰属意識を高める
	0.115	クラスの規範意識を高める			0.141	クラスの互いに高め合う意識を高める
	-0.054	クラス全体の学習への取組を高める			0.111	クラス全体のコミュニケーション能力を高める
互いに高め合う意識	0.233	クラス全体の学習への自信を高める		学習への取組	0.211	クラス全体の学習への自信を高める
	0.210	クラスの互いに高め合う意識を高める			0.176	クラス全体の学習への取組を高める
	0.154	クラスの帰属意識を高める			0.171	クラスの互いに高め合う意識を高める
	0.111	クラス全体のコミュニケーション能力を高める			0.133	クラスの帰属意識を高める

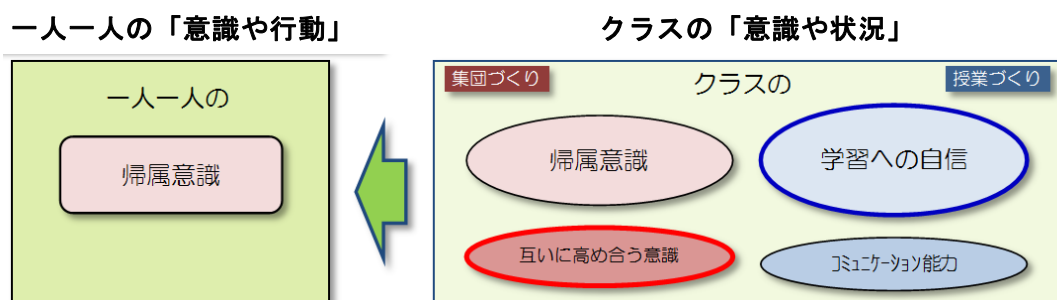
※ 図中の数値は、標準化係数ベータである。統計的に有意なもののみ抽出して表記した。

図7: 結果を整理した一覧 (パンフレットp.4~5)

整理した分析結果である上図7を見ると、クラスの「意識や状況」の各視点と一人一人の「意識や行動」の同じ視点との間に影響関係があることが分かった。例えば、クラスの「帰属意識」が高いと一人一人の「帰属意識」も高くなっている。

更に、一人一人の「意識や行動」には、様々なクラスの「意識や状況」の視点が影響していることが分かる。例えば下図8のように、一人一人の「帰属意識」に対しては、クラスの「帰属意識」はもちろんであるが、授業づくりの視点であるクラスの「学習への自信」も学業指導の柱を越えて一人一人の「帰属意識」に影響しているということである。このことは、視点同士の関連を図りながら学業指導を進める大切さも示していると考えられる。

これらのことから、クラスの在り方が、一人一人の自己実現につながるという「学業指導」の考え方を検証することができたと言える。



※ □ は、児童生徒一人一人の「意識や行動」を、○ は、クラスの「意識や状況」を表す。

図8: 一人一人の帰属意識に与えるクラスの「意識や状況」の影響の大きさ【第2章】

一人一人の「意識や行動」の全ての視点と統計的に有意に強い影響が見られるのが、クラスの「学習への自信」であった。また、クラスの「互いに高め合う意識」も一人一人の「意識や行動」の全ての視点との影響が見られた。このことから、クラスの「学習への自信」とクラスの「互いに高め合う意識」が、学業指導における「鍵」であると言える。この鍵となる2つの視点に関する影響について、整理し下図9に示す。

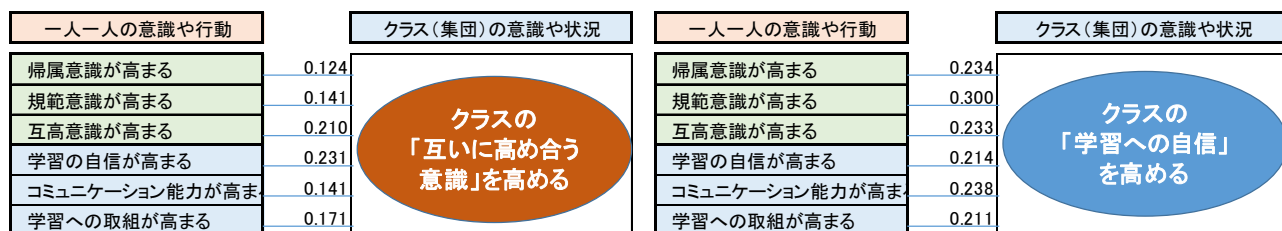


図9: 鍵となる2つの視点の影響

(5) クラスの「意識や状況」が高いクラスの児童生徒の傾向について ～重回帰分析～

クラスの「意識や状況」の6視点ごとに、それぞれの「意識や状況」が高いクラスの児童生徒の傾向を調べるために、自分を評価する質問の6視点×各8問＝計48問に一人一人が回答した結果を説明変数、視点ごとにクラスを評価した各2問のクラス単位の平均値を従属変数として、(4)と同様の重回帰分析を用いて影響の強さを求めた。

学業指導の鍵となる2つの視点について示したのが下表11である。【第3章2-（5）】

なお、標準化係数ベータは、表10でも述べたように、数値が高いほど影響が強い。

表11: クラスの「意識や状況」が高いクラスの児童生徒の傾向 (重回帰分析の結果)

互いに高め合う意識が高いクラスの児童生徒の傾向 (集団づくりの3視点)					
学校段階	標準化されていない係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率
(定数)	2.819	.048		58.744	0.000
規範8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	.040	.010	.131	4.000	.000
帰属8 教室にいると気持ちが落ち着く	.035	.010	.119	3.689	.000
互高1 クラスで話し合う場面では真実に話し合う	.041	.012	.114	3.450	.001
帰属3 クラスの人みんなが仲間だ	.034	.012	.092	2.852	.004
帰属6 学校行事でクラスの人みんなと感動する	.020	.009	.071	2.243	.025
互高5 友だちの意見を聞いて自分の意見を考え直すことができる	.021	.010	.063	2.025	.043
規範2 係や委員会の仕事があれば忘れずに行う	-.026	.012	-.064	-2.170	.030
(定数)	3.065	.034		91.486	0.000
帰属6 学校行事でクラスの人みんなと感動する	.041	.007	.176	5.666	.000
規範8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	.021	.008	.091	2.793	.005
規範4 学校やクラスのルールを守っている	.023	.009	.082	2.620	.009
(定数)	2.789	.035		80.105	0.000
帰属6 学校行事でクラスの人みんなと感動する	.061	.010	.209	6.302	.000
互高2 クラスの中に目標としている仲間がいる	.032	.008	.127	4.037	.000
帰属2 クラスのために役に立ちたい	.032	.011	.099	2.864	.004
規範8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	-.022	.010	-.072	-2.254	.024

a. 従属変数 クラス全体の互いに高め合う意識

互いに高め合う意識が高いクラスの児童生徒の傾向 (授業づくりの3視点)					
学校段階	標準化されていない係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率
(定数)	2.863	.038		74.516	0.000
コミ8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがある	.042	.011	.134	3.987	.000
コミ3 授業中友だちの意見や感想を最後まで聞いている	.044	.011	.120	3.931	.000
自信4 授業中自分の意見が大切にされてうれしかったことがある	.031	.010	.113	3.258	.001
自信6 授業中に先生からほめられてうれしかったことがある	.029	.010	.100	2.896	.004
(定数)	3.092	.031		99.520	0.000
コミ4 授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない	.031	.008	.124	4.023	.000
コミ8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがある	.030	.008	.124	3.881	.000
取組6 家で自分の苦手なところを勉強している	.017	.006	.086	2.725	.007
(定数)	2.777	.040		68.944	0.000
コミ4 授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない	.055	.010	.158	5.321	.000
取組4 先生に話を聞いてもらって勉強の仕方を見直したことがある	.038	.009	.142	4.168	.000
コミ8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがある	.044	.010	.142	4.279	.000
取組6 家で自分の苦手なところを勉強している	.024	.009	.089	2.851	.004
取組3 提出物に先生が書いてくれたことがその後の学習に役立っている	-.054	.010	-.194	-5.527	.000

a. 従属変数 クラス全体の互いに高め合う意識

学習への自信が高いクラスの児童生徒の傾向 (授業づくりの3視点)					
学校段階	標準化されていない係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率
(定数)	2.589	.045		57.366	0.000
自信6 授業中に先生からほめられてうれしかったことがある	.041	.011	.121	3.640	.000
コミ3 授業中友だちの意見や感想を最後まで聞いている	.051	.013	.117	3.798	.000
取組8 先生に話を聞いてもらって勉強の仕方を見直したことがある	.031	.010	.096	2.999	.003
コミ8 話し合いの中で意見がまとまってよかったと思うことがある	.035	.012	.096	2.819	.005
コミ1 授業中安心して発言することができる	.024	.011	.071	2.235	.026
(定数)	2.820	.043		65.424	0.000
取組3 提出物に先生が書いてくれたことがその後の学習に役立っている	.030	.009	.118	3.460	.001
自信6 やる気をもって授業に取り組んでいる	.031	.011	.105	2.856	.004
コミ4 授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない	.030	.009	.096	3.141	.002
コミ1 授業中安心して発言することができる	.019	.008	.073	2.226	.026
取組7 授業中むずかしい問題を出されるとやる気が出てくる	.015	.008	.066	1.972	.049
自信6 授業中むずかしい問題が解けてうれしかったことがある	-.025	.011	-.076	-2.296	.022
(定数)	2.324	.043		53.748	0.000
取組8 家で自分の苦手なところを勉強している	.049	.009	.188	5.699	.000
取組7 授業中むずかしい問題を出されるとやる気が出てくる	.030	.008	.117	3.578	.000
コミ7 授業中話し合いを聞いて自分の考えが深まる	.033	.010	.111	3.247	.001
取組8 先生に話を聞いてもらって勉強の仕方を見直したことがある	.027	.008	.109	3.304	.001
コミ8 授業中友だちの意見や考えが自分とはちがっていてよく聞く	.036	.013	.098	2.841	.005
コミ4 授業中友だちの発言をばかにして笑ったりしない	.031	.010	.094	3.030	.003
自信3 よく理解できなかったところを聞いたり復習したりする	.026	.010	.092	2.622	.009
自信5 授業中でできるだけ自分ひとりの力で問題を解決しようとしている	.024	.009	.080	2.658	.008
自信4 授業中自分の意見が大切にされてうれしかったことがある	.021	.010	.080	2.155	.031
自信1 授業の内容をだいたい理解している	-.022	.011	-.064	-2.022	.043
自信2 授業中むずかしい問題が解けてうれしかったことがある	-.024	.010	-.082	-2.437	.015
取組3 提出物に先生が書いてくれたことがその後の学習に役立っている	-.031	.009	-.116	-3.469	.001
自信6 授業中に先生からほめられてうれしかったことがある	-.035	.009	-.136	-3.854	.000

a. 従属変数 クラス全体の学習への自信

学習への自信が高いクラスの児童生徒の傾向 (集団づくりの3視点)					
学校段階	標準化されていない係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率
(定数)	2.517	.061		41.550	0.000
規範8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	.055	.012	.155	4.786	.000
互高1 クラスで話し合う場面では真実に話し合う	.052	.014	.122	3.754	.000
帰属8 教室にいると気持ちが落ち着く	.041	.011	.119	3.838	.000
規範1 学校やクラスのルールを守めることは大切だ	.050	.018	.088	2.846	.005
互高8 クラスで活動していて自分のよいところに気がつくことがある	.030	.011	.088	2.729	.006
規範3 授業が始まる前にも着席している	-.027	.012	-.067	-2.208	.027
(定数)	2.751	.042		65.282	0.000
規範8 クラスの人とおたがいに注意し合っている	.031	.010	.107	3.029	.003
帰属7 教室のけいじ物がはがれていたら直す	.019	.008	.072	2.229	.026
互高8 クラスで活動していて自分のよいところに気がつくことがある	.019	.009	.071	2.124	.034
規範3 授業が始まる前にも着席している	.024	.011	.070	2.106	.035
規範4 学校やクラスのルールを守っている	.025	.012	.069	1.974	.049
(定数)	2.338	.047		49.858	.000
互高2 クラスの中に目標としている仲間がいる	.060	.008	.247	7.969	.000
帰属2 クラスのために役に立ちたい	.057	.011	.186	5.361	.000
規範1 学校やクラスのルールを守めることは大切だ	.046	.012	.115	3.698	.000
規範3 授業が始まる前にいつも着席している	.036	.010	.105	3.574	.000
互高6 係や委員会などの仕事に工夫をしながら取り組んでいる	-.021	.010	-.068	-2.070	.039
帰属6 学校行事でクラスの人みんなと感動する	-.038	.009	-.135	-4.154	.000

a. 従属変数 クラス全体の学習への自信

これらの分析結果から、発達の段階によって児童生徒の傾向に差異があることが分かった。また、この結果は、限られた質問項目内での結果であるが、具体的な指導のための手がかりとしての活用が可能であると考えられる。そこで、「互いに高め合う意識」と「学習への自信」については、各学校段階の1位にランクされた項目のみ、パンフレットのp. 6、7の最下部に掲載した。

(6) クラスの「意識や状況」の6つの視点間の関連について ～ピアソンの積率相関係数～

クラスを評価した各視点2間によるクラスの「意識や状況」の6つの視点同士の関連を調べるためにピアソンの積率相関係数を求めた。この相関係数は、「一方が増加すると他方も増加する（あるいは一方が減少すると他方も減少する）関係は正（プラス）の相関または順相関と呼ばれる。これに対して、一方が増加すると他方が減少する（あるいは一方が減少すると他方が増加する）関係は負（マイナス）の相関または逆相関と呼ばれる。そして、2変数間にそうした関係が見られないときには無相関と呼ばれる。相関係数はそれらの程度を1つの数値で表すとても便利な指標である。」*8とされている。相関係数は、-1 から 1 の間の実数値をとり、1 に近いときは2つの変数には正の相関があるといい、-1 に近ければ負の相関があるという。また、0 に近いときは変数同士の相関は弱いということになる。

この結果を下表12に示す。【第3章2- (6)】

表12: クラスの「意識や状況」の6つの視点間の相関係数

		クラス全体の 帰属意識	クラス全体の 規範意識	クラス全体の 互いに高め 合う意識	クラス全体の 互いに学 習への自信	クラス全体の コミュニ ケーション 能力	クラス全体の 学習への 取組
クラス全体の 帰属意識	ピアソンの相関係数	1	.534**	.911**	.768**	.686**	.553**
	有意確率（両側）		.000	0.000	0.000	0.000	.000
	度数	3579	3579	3579	3579	3579	3579
クラス全体の 規範意識	ピアソンの相関係数	.534**	1	.566**	.566**	.436**	.221**
	有意確率（両側）	.000		.000	.000	.000	.000
	度数	3579	3579	3579	3579	3579	3579
クラス全体の 互いに高め 合う意識	ピアソンの相関係数	.911**	.566**	1	.790**	.640**	.537**
	有意確率（両側）	0.000	.000		0.000	0.000	.000
	度数	3579	3579	3579	3579	3579	3579
クラス全体の 互いに学 習への自信	ピアソンの相関係数	.768**	.566**	.790**	1	.798**	.737**
	有意確率（両側）	0.000	.000	0.000		0.000	0.000
	度数	3579	3579	3579	3579	3579	3579
クラス全体の コミュニ ケーション 能力	ピアソンの相関係数	.686**	.436**	.640**	.798**	1	.660**
	有意確率（両側）	0.000	.000	0.000	0.000		0.000
	度数	3579	3579	3579	3579	3579	3579
クラス全体の 学習への 取組	ピアソンの相関係数	.553**	.221**	.537**	.737**	.660**	1
	有意確率（両側）	.000	.000	.000	0.000	0.000	
	度数	3579	3579	3579	3579	3579	3579

**：相関係数は1%水準で有意（両側）です。

この表をもとに、相関係数を矢印の太さに表して、視点同士の相関関係を視覚化した図の一つ（帰属意識の例）を下に図10として示す。

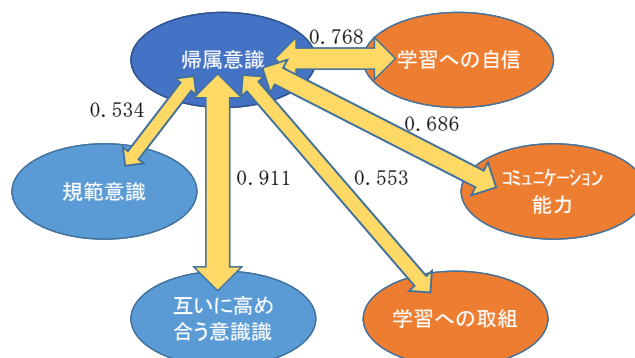


図10: クラスの「意識や状況」の6視点相互の関連

分析結果を見ると、全ての視点間に有意な相関関係があり、学業指導の6つの視点同士には、確かな関連があることが分かった。つまり、学業指導は6つの視点同士の関連を図りながら指導することが大切であることを確認できた。このことは、例えばクラスの「帰属意識」を高めたいと考えたときに、クラスの「帰属意識」を高めようとするだけでなく、他の視点（例えば、クラスの「コミュニケーション能力」など）を高めることも有効であることを示している。

6 学業指導尺度「学級と学習に関するアンケート」と分析ツール

本調査研究の成果物である、学業指導尺度「学級と学習に関するアンケート」【第2章 p.10】と分析ツールの内容及びその活用について、次に述べる。

(1) 学業指導尺度「学級と学習に関するアンケート」

- ・対象：児童生徒（小学校4年生以上*、中学生、高校生）
*小学校3年生以下については、先生が問題を一問一問読み上げ、説明しながら回答させることで、実施が可能であると考えられる。
- ・用紙：A4判 1枚
- ・構成：30問（6視点、各5問）
- ・所要時間：10分～15分程度

(2) 分析ツール

- ・利用方法：学業指導尺度「学級と学習に関するアンケート」及び分析ツールは、
栃木県総合教育センターWebサイトより、ダウンロードして利用できる。
http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/gakkyutogakushu_h26/
- ・使用ソフトウェア：マイクロソフト Excel（一部 マクロ使用）
- ・特長：アンケートの回答結果を入力すると、ワンクリックで次に示す表とグラフを作成することができる。



(3) 学業指導尺度「学級と学習に関するアンケート」の準備と処理について

- ア はじめに、学業指導尺度「学級と学習に関するアンケート」を上記の Web サイトよりダウンロードし実施人数分を印刷する。（小学生用ふりがな付きあり）
- イ アンケート実施後、上記の分析ツールを使用しアンケート結果を入力する。
- ウ 下のメニュー画面が出てくるので、マクロを有効にする。

学級と学習に関するアンケート *Menu*

① 学校名を入力

瓦谷町立センター

校種
☐ 小学校
☒ 中学校
☐ 高等学校

② 調査回答を入力

第1回目の調査回答を入力

第2回目の調査回答を入力

調査人数表の
入力と印刷

全データを消去

③ 印刷

印刷内容
☒ 1回目と校内平均
☐ 1回目と2回目

クラス全員分の
グラフを印刷する

視点ごとの平均の
グラフを印刷する

調査結果の平均表を
印刷する

個人の表とグラフを
印刷する（5名ごと）

※マクロを**有効**にして使用してください。

！ セキュリティの警告 一部のアクティブ コンテンツが無効にされました。クリックすると詳細が表示されます。 **コンテンツの有効化**

オプションをクリックして『コンテンツの有効化』をクリックしてください。

次の手順（①～③）で処理する。

① 「学校名を入力」する。

② 「第1回目の調査回答を入力」をクリックする。

次頁のような入力画面が現れるので、「調査日」、「学年・組・出席番号」、「1～30の回答」を入力する。

※欠席の場合は、行を詰めて入力する。

※回答数が半分以下の場合は、結果は表示されないのに注意。

入力が終わったら、「メニューへ戻る」でメニュー画面に戻る。

アンケート回答一覧(第1回目調査)

メニューへ戻る

学年・組・出席番号および対応する質問番号に回答(1～4)を記入してください。

整理no.	学年	組	出席番号	質問番号																													
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
10101	1	1		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
10102	1	1		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
10103	1	1		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
10104	1	1		4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30			
10105	1	1		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30				
10106	1	1		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30					
10107	1	1		7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30						
10108	1	1		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30							
10109	1	1		9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30								
10110	1	1		10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30									

学年・組・出席番号を入力すると、自動的に整理番号が作成されます。
例) 10101 = 1年1組1番

※整理no.の欄には数式が使われています。

回答入力について
1 = あてはまらない
2 = あまりあてはまらない
3 = ややあてはまる
4 = あてはまる
空白 = 無回答・複数回答・その他

この表示はセルを右クリックして「コメントを表示しない」で消えます

※欠席の場合は行を詰めてください(学年を入力してしまつと人数としてカウントされてしまいます。)

※回答数が半分以下の場合は、結果は表示されません。

③ 「印刷」をする。

印刷実行の前に、メニュー画面の※調査人数表の入力と印刷をクリックする。

次のような画面が現れるので…、

印刷される範囲は以下の 白抜き になっている部分です。

※ 印刷の実行の前に「調査日時」、「欠席者数」および「無効回答者数」を入力してください。
その他は自動計算のため入力不要です。

※ 不必要な学年やクラスがある場合には、行全体を選択して、行を非表示にしてください。

メニューへ戻る

印刷をする

▼ 以下の表には数式が使われています。

学業指導アンケート (第1回目実施) 2015/5/1

調査校 : 瓦谷町立センター中学校

調査対象	人数	第1回目	
		欠席者数(出席番号)	無効回答者数(質問番号)
校内全体	413	0	0
1年生	361	0	0
2年生	52	0	0
3年生	0	0	0
4年生	0	0	0
5年生	0	0	0
6年生	0	0	0
1-1	27	()	()
1-2	34	()	()
1-3	36	()	()
1-4	24	()	()
1-5	23	()	()
1-6	38	()	()
1-7	32	()	()
1-8	33	()	()
1-9	39	()	()
1-10	31	()	()
1-11	22	()	()

E列にはクラスごとの欠席者数を入力してください。
F列の()内には欠席した生徒の出席番号や備考を入力してください。

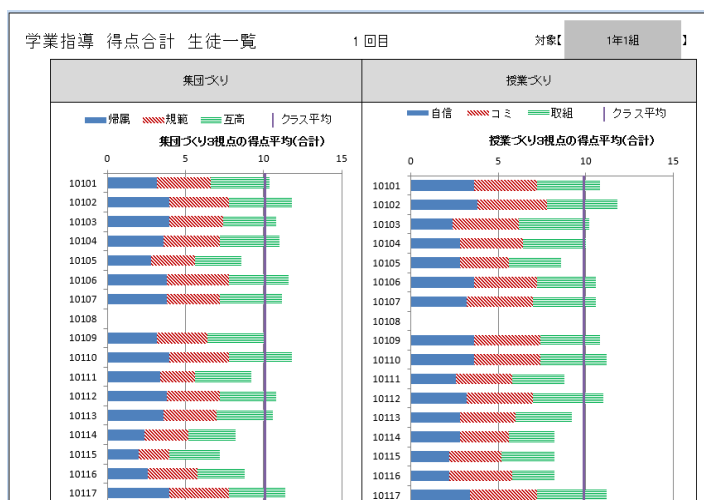
G列にはクラスごとに無回答または複数回答をした生徒の人数を入力します。
H列には無効回答をした質問番号を入力してください。

「調査日時」「欠席者数」「欠席した生徒の出席番号」や「無効回答者数」「無効回答した質問番号」を記入する。

※ここまで完了したら、「メニューへ戻る」でメニュー画面に戻り、印刷を行う。

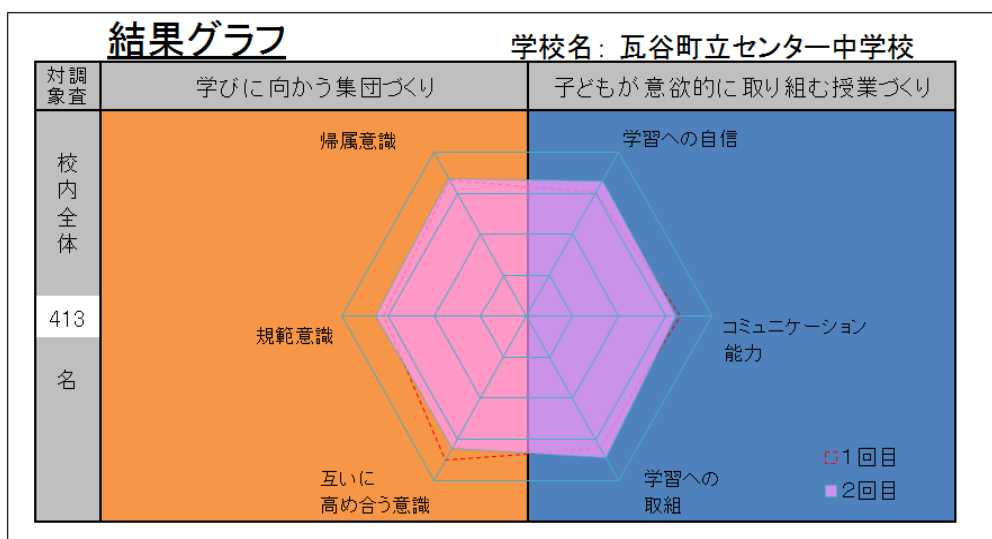
印刷に関しては、以下に示すグラフやコメントを参照のこと。

◇「集団づくり」と「授業づくり」に関する得点合計（生徒一覧）のグラフ



・クラスの児童生徒一人一人の「集団づくり」、「授業づくり」の状況が視点ごとに確認できる。

◇「集団づくり」と「授業づくり」に関する視点ごとの平均のグラフ



・クラスの「集団づくり」、「授業づくり」の状況が一目でわかり、強みと弱みを確認できる。
・県平均との比較ができる。

◇「集団づくり」と「授業づくり」に関する調査結果の平均一覧表

調査校：瓦谷町立センター中学校		※比較＝前回調査結果との差 赤字＝0.2以上上昇 青字＝0.2以上下降					
	調査対象	集団づくり			授業づくり		
		帰属	規範	互高	自信	コミ	実態
校内	校内全体	3.37	3.26	3.22	3.30	3.24	3.44
	1回目	3.33	3.09	3.50	3.01	3.33	3.21
	比較	+0.04	+0.17	-0.28 ↓	0.30 ↑	-0.10	0.24 ↑
	栃木県平均	3.39	3.34	3.35	2.97	3.17	2.98
1年生	1年生	3.36	3.25	3.20	3.30	3.22	3.44
	1回目	3.30	3.08	3.49	2.98	3.31	3.20
	比較	+0.06	+0.17	-0.29 ↓	0.32 ↑	-0.10	0.23 ↑
	栃木県平均	3.42	3.39	3.40	3.12	3.25	3.10
2年生	2年生	3.41	3.37	3.34	3.37	3.38	3.50
	1回目	3.50	3.20	3.59	3.23	3.47	3.26
	比較	-0.09	+0.17	-0.25 ↓	+0.14	-0.09	0.24 ↑
	栃木県平均	3.33	3.28	3.29	2.91	3.11	2.91

・クラスの「集団づくり」、「授業づくり」の平均値と本県（校内全体）、学年（学級）間の比較ができる。

◇「集団づくり」と「授業づくり」に関する個人の表とグラフ



- ・各視点、個人ごとの平均値の一覧及びレーダーチャートが見られる。
- ・教育相談や面談等で活用できる。

(4) 活用について

今回実施した県内抽出校による質問紙調査の結果のうち、学業指導尺度として精選した各視点における5問ごとの学年別の平均値は、下表のとおりである。【第3章2-(7)】に、学校段階別の結果と共に掲載）なお、分析ツールでは、自校の状況と県の平均との比較ができるようになっている。

表 13：各視点の学年別平均値【第3章2-(7)】より

	集団づくりの3視点			授業づくりの3視点		
	帰属意識	規範意識	互いに高め合う意識	学習への自信	コミュニケーション能力	学習への取組
小学校第4学年	3.24	3.29	3.29	3.09	3.16	3.12
小学校第5学年	3.26	3.27	3.33	3.05	3.16	3.03
小学校第6学年	3.30	3.26	3.36	3.05	3.11	3.01
中学校第1学年	3.42	3.39	3.40	3.12	3.25	3.10
中学校第2学年	3.33	3.28	3.29	2.91	3.11	2.91
中学校第3学年	3.42	3.36	3.36	2.88	3.16	2.92
高等学校第1学年	3.26	3.32	3.15	2.72	3.07	2.87
高等学校第2学年	3.15	3.25	3.12	2.60	2.90	2.74
高等学校第3年生	3.15	3.21	3.10	2.61	2.88	2.74

校内における学業指導の（R）PDCAサイクルの構築の際、学業指導尺度「学級と学習に関するアンケート」をR（実態把握）や、C（評価）の時期に行うことが考えられる。【第2章 調査報告書（概要）p.12】その時、単純に視点同士の比較で子どもたちの「強み」や「弱み」を確認するのではなく、県平均との比較をすることで自校の「強み」や「弱み」を把握することが有効である。その差に注目しながら課題を把握することで、具体的な指導の手立てを考える際に役立てていただきたい。

<引用・参考文献等>

- ・学業指導の充実に向けて-学業指導を全ての教職員が進めるために- 栃木県教育委員会 平成24年3月
- ・学業指導「教職員用リーフレット」 栃木県教育委員会 平成21年1月
- ・「学業指導」実践事例集 栃木県教育委員会 平成26年3月
- ・学業指導の充実～子どもが意欲的に取り組む授業づくりを通して～ 栃木県総合教育センター 平成26年3月
- ・学ぶ意欲をはぐくむ-「学習に関するアンケート」を活用して- 栃木県総合教育センター 平成23年3月
- ・高めよう！自己有用感～栃木の子どもの現状と指導の在り方～ 栃木県総合教育センター 平成25年3月